

都・建設予定地 生活記 (15)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕的生活記。

今までガンディーナガル・アーメダバードにこもりっぱなしだったのだが、最近は、デリーに行くことが多くなってきた。そうすると、つい自分の住んでいる場所と比べてしまうものだ。同じ国ではあるけれど、首都デリーと、州都ガンディーナガルでは全然違う。お酒とお肉を別にして、僕が驚くことがふたつある。ひとつは、もちろん空気だ。

インドにいると iPhone の天気アプリは常に「煙霧」とか「もや」とか表示されていて、「晴れ・くもり・雨」の国の人間は「それは天気なのか……？」と首を傾げざるを得ない。

デリーは「日本人のみなさん、天気が煙霧とはこういうことです」と胸を張って見せてきているみたいだ。煙霧というか、結界でも張っているように白く霞んでいる。建物の中まで若干、白い気がする。空を見れば、すべてが白く閉じていることもあるし、天球の頂点だけがぽっかり青かったりする。雲以外のもので、空が見えないとなると、「あ、うん、まあ、これは天気煙霧としか書けないよね……」と妙に納得せざるを得ない。

ガンディーナガルもまた、天気が煙霧である。だがこちらはといえば、空は常に雲量0の快晴で、日本の夏空と同じくらいに青い。澄み渡っている。おかげで一月も暑かった。確かに言われてみれば、そりゃあ埃っぽいし、夕焼けが若干淀んでいるような気がしないでもないが、基本的には「デリーに合わせて煙霧って書いてるだけじゃないのか？」と勘ぐれるようないい天気である。デリーから戻って空港を出ると、ここならマラソンとかもしやすいなあ、と思うくらいだ。こういうところは、勝ってるぞグジャラート！と思うのだが、うちに向かう道の光景を見ていると、いや、そうでもないか……と思いなおす。

その一番の原因は、野犬の存在だ。「あら、デリーにだって野犬はいるわ」というのはわかる。でも、そういうことじゃない。問題はその姿だ。とにかく痩せている。太った犬はほぼ見かけない。ガリガリで骨が見えているやつも多い。それもそのはず、ここはベジタリアンの世界である。当然、食べ残しや、おこぼれにあずかる野犬もベジタリアンになる。

デリーに行くと、野犬があまりにも立派でびっくりする。太い尻尾を振って肉に噛み付いていたり、お前は野犬なのか、と尋ねたくなるくらい太りきったものまでいる。なんとなく、野犬から豊かさの違いを見せつけられている感じがする。空港からの帰り道でそんな野犬を見ながら、やっぱり、デリーとは違うよなあ、と思うのだ。

しかし、こちらの野犬もベジ食に甘んじているわけではない。この空気なら走れる、とばかりに走り回り、狙いすまし、油断した鳩を捕まえて食べている。時々、羽根の残骸が中庭に散らばっている。彼らもまたベジ食と戦っているわけだ。

……と違いを比べていたら肉の話になってしまった。なんだかんだで、結局、一番の違いはやっぱりそこなのだ。

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。